

〔書評〕

柴田 武著

『糸魚川言語地図 上巻』

はじめに

待望久しかった『糸魚川言語地図 上巻』(上・中・下三巻のうちの上巻)が公刊されるにいたった。斯界にとつて、まことに喜ばしい。著者をはじめ関係諸氏の、今日までの長いご尽力、いかばかりだったか。それだけに、この公刊の喜びもいかばかりか。心より拝察、およろこび申し上げる。

察するに、著者の多岐にわたる研究活動の中にあつても、この糸魚川地域(——糸魚川市及びその近隣諸域)の方言の地理学的研究には、おそらく、氏のライフワークの一つであるにちがいない。それだけの内容と意義とを、それは有している。

この度公刊されたものは、

- ① 『地図集』 一三四葉 (B4)
- ② 『データ集』 一一二六頁 (B5)
- ③ 『解説編』 三四四頁 (B5)
- ④ 『The Linguistic Atlas of Itoigawa Niigata Prefecture, Japan I』 二〇三頁 (A5)

の四種四冊である。

大橋 勝 男

一 日本の方言地理学と当研究行の意義

日本には、明治以来、国語調査委員会、柳田国男、東条操などの方言地理学的研究の流れがあつたにもかかわらず、戦後の昭和二十年代は、その沈黙期であつた。三十年代に入り、その沈黙を破るものが、昭和三十二年、国立国語研究所の「日本語地図作成のための調査」であり、同所所属の柴田・徳川・グロータース氏による、同年の「糸魚川言語調査」である。この両者は、車の両輪の如く、以後の日本の方言地理学振興の誘引的・牽引的機能を果たすことになつた。その意味において、両者は、国語学史的に多大な貢献と意義とを有する、と先ず評しうる。

なお、ここで、声を大にして記さねばならないことがある。それは、国立国語研究所及び柴田氏とグロータース氏との邂逅という歴史的めぐりあわせについてである。西洋に発達した言語地理学を、言語学者の父のもとで本格的に豊かに身につけ、以後中国において実践的に研究の力をつけ、勇躍来日した若きグロータース神父は、宣教にも劣らない宣学の師でもあつたのだ、と言える。

グロータス神父からは言語地理学の具体的な方法を教わった。言語地理学の方法や成果は、大学に入学した一九三八年、言語学演習の時にドーザ「言語地理学」を原本で読まされ、かなり学んでいるつもりだった。しかし具体的に資料をどのように整理し、どのようにして推定するべきものかはドーザの入門書は何も教えてくれなかった。方言調査基礎図の概念もグロータス神父から初めて得た。語を聞き取るときに、その場の状況や話者のコメントも全部書きとつてくること、ゴム印とカラーのスタンプリントを使って地図を書くことなど、こまごまとしたことも伝授された。(「解説編」p.七)

という柴田氏の率直な記述にも、それは明らかである。これによつて、我が国の方言地理学は、戦前までの伝統的な方言地理学から、一挙に、西洋言語地理学的な、より科学的な方言地理学へと飛躍することになったと言つても、過言ではない。その意味において、この邂逅は、単に個人的邂逅にとどまらず、西洋言語地理学と日本方言学の邂逅という歴史的意義を有し、以後の日本方言学のために、かけがえない幸運であったと、評者は強く考えるのである。

思う。学問の展開に、人がいかに運命的に関わるかを。グロータス氏とのことは言うに及ばない。

2 回目の定年退官後、職に一切つかず、糸魚川の仕事に専念すべしと主張したのも、コンピュータ処理を勧めたのもさだである。(「同」p.八)

井口三重は、わが娘で、いまは家庭の専業主婦である。しかし、専攻した計測工学の知識と技術を發揮して、コンピュータ処理を一手に引き受けてやつてくれた。印刷間近かには徹夜をして地図やデータのプリントアウトの要求に応じてくれた。(「同」p.八)

等の叙述に見る如き、伴侶、御子女との関わり。妻・さださん、娘・三重さんの、その一言、その道、その協力がなかったら、有能な氏のこと、はたして、「糸魚川の仕事に専心」し、この成ることを、世間が許したか否か。人の関わり、めぐりあいが、研究者の運命にいかに関わり、ひいては、日本の斯界の進展・充実に、いかに重大に関わるかを思わないではいられない。よき伴侶と御子女に氏が恵まれたことは、日本の方言地理学の展開にとつて、まことに幸せなことであった。評者は、感銘深く、それに感謝しないではいられない。

同時に思う。せっかく、柴田・徳川・グロータス氏、そして、第三次調査には馬瀬良雄氏の参加をも得た協同研究であったにもかかわらず、結果として実を結んだ『糸魚川言語地図』及びその解説・資料の書が、柴田武氏お一人によつて公刊されることになったことを。なぜ、全員によつて公刊されるものとはなりえなかったのか。柴田氏お一人によつても、かくも偉大な成果を結果しえた。もし、最後まで、全員による徹底した協同研究が全うされたならば、当研究は、なおなおのことすばらしい光輝を得、日本方言地理学の本格の夜明けの歴史を、いっそううるわしく飾りえたのではないかと。糸魚川地方の言語地理学的研究の企図が一九五六年、第一次調査が一九五七年、第二次調査が一九五九年、第三次調査が一九六一年。三十数年前、熱情をもつて調査に専心された、若々しき各位の、当研究への胸のうちは、いかなるものであったのであろうか。以後の「糸研」(糸魚川研究室)なるものは、いかなるものであったのであろうか。ここにもまた、別な意味での、学問と人との運命的な関わりを思わないではいられない。

『資料編』末部に記されている、おびただしい数の、当研究に即

する「既発表物」をよく見ると、大部分が思い思いの個人的発表物であり、かつ、散発的であるとの感がある。これも、もし、真に協同研究の精神に徹されたならば、さらに体系的・本格的研究が、方言研究界の大先達たる各位の叡智の相乗作用をも得て大帰結していったのではないかと愚考するのである。日本の方言地理学の今後のために、なお、それを切望し、いつそう牽引的機能を發揮されたことを期待してやまない。

なお、当研究には、文部省の科研費のほかに、外国の個人などより、五種の研究費援助があつたという。まことに慶賀にたえない。このあたりにも、グロッタース氏の西洋流のよき影響があつたのではないかと推察する。この先例が、以後の我が国において、世間に、研究への理解・支援を啓発する、強い契機づけとなつてくれることを期待するものである。

二 当研究の目的と、対象地域の設定及び研究の実際について

当研究の目的は、『解説編』に、

糸魚川地方の言語に関する情報と分析を提供するだけでなく、言語

地理学の方法を開発することに目的があつた。(p.一八)

とある。同趣のことは、既著、『言語地理学の方法』(昭四四、八)の「糸魚川調査」の項に、

この調査の目的は、早くから日本へ紹介されていた言語地理学の方法を日本語地域のどこかに本格的に適用して、その方法の妥当性を確かめ、さらに新しい方法を見つけ出すことである。(p.六二)

とある。早くから日本に紹介されていた言語地理学ではありながら、

それは、戦後に至るも、本格的に日本語に即して適用し、その方法の可能性と特性、そして限界性について確かめられるには至つていなかった。そのような当時の状況下であるが故に、「糸魚川地方の言語に関する情報と分析を提供する」ことにのみ目的を求めず、言語地理学の方法について、「その妥当性を確かめ、さらに新しい方法を見つけ出す」ことに大きな目的を求めたことは、いかにももつともなことである。このような学界状況下にあつては、むしろ、この後者こそが、主要な目的であつた、いな、目的であるべきであつた、と言えよう。まさに、それは、方言地理学における明治維新的状況と見なざらえられるのである。その意味においては、方言地理学の一見盛況かに感じる現学界状況においても、その事情は、なお、さほど変わつていないように、評者には思える。ましてや、当時、同時に、国立国語研究所の全国的規模での『日本言語地図』の企画・推進に迫られていた状況下にあつては、なおさらのことである。その目的設定は、必然的なものであり、妥当なものであつた、と評しうる。

さて、その目的のために、どの地域の言語を対象とすかとなつた時、

このような目的のためには、調査地域は、実はどこでもよかつた。

(『言語地理学の方法』p.六二)

とは、やや安易の感がある。著者達各位が糸魚川域を対象に設定したのは、

この地域は地域差が著しいと思われたからである。糸魚川・青海地域は有名な東西両方言の接触地帯である。(同) p.六二

との理由からのものである。しかし、実践の結果は、『地図集』をは

じめ、著者の述懐に見る如く、

しかし、実際には、東西両方言の接触地帯ということとは、地理的分布にとつて期待したほど有効ではなかった。〔同〕 p.六二

というありさまである。であれば、既見の目的のためには、このような見地からの対象域設定は失敗であつたということになる。このあたりに、一つ、我が国方言研究界屈指の各位ですら、当時としては、方言地理学に関して、明治維新的状況下での限界があつたことを、かいま見るのである。実践してみても、はじめ

どんな地域にも地理的分布は見出されるものであるらしい……。

〔同〕 p.六三

と、言語の地理的分布の本性を学ぶに至るのである。これは、フロンティアの味わわざるをえない、やむをえぬ試行錯誤であつた。

しかし、幸いにも、結果的には、その失敗は救われた。それは、当対象域が、

山がけわしく、谷と谷とが、ことに一つへだてた谷どうしはコミュニティケーションがほとんどないというほどの地勢上の条件が有効な成果をもたらしたものだと思われる。〔同〕 p.六三

という地理的特性を持つていたからである。事実、当域は、日本海沿岸部に狭いながら平野部を有し、内陸は、日本アルプスの張り出しにより、一〇〇〇〜二〇〇〇メートル級の山が十数余もひしめき、その山塊の鬚をぬつて無数の谷、そこを流下する十数余の本・支流の川を有する。加えて、沿岸に北陸街道が平行し、沿岸と直角に、内陸に向かつて松本街道が走り、新潟県、及び、富山県方面・長野県方面との人的・文化的交流の交叉要衝の地である。歴史的には、糸魚川藩を中心に、東に高田藩、西に加賀藩、南に松本藩が接する。

このような、自然地理的・人為的条件の複雑性故にこそ、七〇・八×八〇・八キロメートルという、新潟県西端の当対象域は、『地図集』をはじめ、『言語地理学の方法』別冊地図に見る如く、方言事象とその分布が複雑多岐にわたる、まさに、言語地理学の実験的研究対象域にふさわしいものたりえたのである。このことは、当研究のため、基本的に重要なことであり、まことに幸運なことであつた。

上記の目的のために、

言語地理学の方法は言語の変遷の過程と要因とをキメ細かく追究することにあり、比較的狭い地域を選んで、その地域はできるだけ詳しく調べ上げる必要があるとは考えた。実際に糸魚川・青海地域に存在する約一八〇の集落（大字・小字と言われるもの）を全部、一つ残らず、いわゆる「しらみつぶし」に調査したのは、そのためである。〔同〕 p.六二

という方法をとつたことは、まことに妥当であつた。同時に、当対象域は、それに応えるのに、まさにふさわしい好条件を備えていたのだつた。

さて、このような対象域に対して、どのような調査事項をもつて臨むか。方言地理学の生命は、この一点に大きくかかっている。設定の理想は、対象域の諸方にボーリング的な体系的記述を行い、その体系的比較をととして帰納することである。しかし、それは、当時としては、急の用にたたない。その種の既資料にも乏しい。先ずとつた方法は、

東条操編『標準語引分類方言辞典』（東京堂、昭二九）で全国的に方言量の多い項目を候補項目とした。全国的に方言量が多い項目は、この狭い地域でも比較の方言量が多いだろう。すなわち、地域差も出や

すいだらうと考えたわけである。(「同」p.七〇)

というものだった。これは、きわめて賢明、効率のよい着手法であった。そうしつ、

二年目には、初年度の調査中に得た情報を利用して項目をたてた。

三年目には、一年目、二年目に得た情報のほかに、第三回調査の前にもつて、一一地点について予備調査したのから得ている。(「解説

編」p.五三)

という方法をとつたのは至当である。そのためであろう。「資料編」の調査項目一覧表を見ると、当対象域の地域性によく即した項目が、かなりある。例えば、雪関係、家屋関係、農業関係、衣関係、民俗行事関係等の事項がそれである。このようなものは、現地に降り立ってはじめて知るといった性格のものである。これらは、いかにも当域のための望ましい立項として、評価される。

また、「方法の開発」という精神のあらわれとも見られる、意欲的な立項が注目をひく。例えば、「鶏の鳴き声」「鳥追いの歌」「理解語」「方言境界の意識」等をはじめ、その他、言語外の関連事項「婚姻圏」「買物圏」「学区」「神社と氏子」等々。これらの中には、以後の研究者や研究界に大きな影響を与えたものが少なくない。また、例えば、農業関係のもので、「鳥おどし」や「稲架」について、その種類や部分名を実に細密多岐にわたって問う項目を準備しているのなども、意欲的な点と見うる。

ただ、全体的には、語彙項目が主であつて、音声・アクセント・文法項目が少ない。この点は、「言語地理学の方法開拓」の精神に徴する時、円満な立項とは評しかねる。ヨーロッパの言語地理学の成立契機の一つが、青年文法学派の、「音韻法則に例外なし」という言

信を論破啓蒙する目的にあつたという歴史的事情からしても、言語地理学は、決して、単に語史構成を主とすべき性格のものではなかつたはずである。当研究が、語彙項目に偏らざるをえなかつたのは、察するに、一つには、さほど広くない対象地域の中で、多様な方言差・地域差を求めなければならなかつたこと、二つには、立項の初期段階で、「標準語引分類方言辞典」といった、いわゆる俚言集的なものによつたこと、三つには、当域の諸地での、方言生活・方言会話等に直接触れての、体系的・記述的調査を経なかつたこと、四つには、調査者が複数であり、しかも、一人が外国人であつたため、聞き取りにおいて個人差が出がちだつたこと、等の理由が考えられるようか。

せつかく立項されている音声・アクセント・文法項目も、よく見ると、

これらはすべてが、あらかじめその特徴について調べるための項目として設けたとは限らないものである。(「解説編」p.五三)

と、著者も良心的に記している如く、対象方言の実態に即して立てた、当対象域の地理的方言状況をきめ細かく描き出すためのものは、かならずしも言いがたいものが少なくない。当研究及び、国立国語研究所の「日本語地図」が、共に語彙本位であつたことは、以後の日本の方言地理学をそのような方向に偏よらせる影響を与えた一面があつたように、評者には思える。方言地理学の可能性は、言語の諸面にわたり、豊かに開けている。今後は、その開けた世界に、研究が広く展開し、広く方法が開発されていくことを、斯界に、切に期待したい。

とは言え、当時の状況下での急務としては、それはやむをえな

ったことである。いな、それどころか、そのような状況下にもかかわらず、語彙面に関してなりに、これだけ周到にこれだけ徹底した立項と実践が成されたことは、まことに驚嘆に値するものであり、フロンティア・大先達に対して、心より敬意を呈してやまないものである。

複数者での調査という問題点についても、各位は用心深い配慮に努め、「ジグザグ調査」等の手当てを試みている。調査も、生え抜き（外住経験五年内）男性七〇歳前後のインフォーマントに、直接自宅で面接調査している。しかも、調査期間は、五年間に三回、各一回年内に全地点を調査している。このようなことも、今でこそ当然のこととなっているが、当時としては、画期的なことだったと言える。「しらみつぶし」なる全集落調査も、当対象域の規模と特性に徴する時、有効・妥当な判断であり、努力であった。当研究によって、我が国の方言地理学は、言語の科学として、格段の充実を見たと言っても、過言ではない。

三 『データ集』『地図集』『解説編』について

『データ集』の中の「採録資料」は、『地図集』と同等の、考えかたによつては、それ以上の価値を有する。「採録資料」には、『地図集』に符号化される、そのものものが、そのまま全地点について、発音記号によつて一覧に供されている。加えて、インフォーマントの付加した、新古、使用状況、回答状況、諸説明等や調査者の問いかた等も記されている。

現地では各人が記録して来たものを、そのまま手を加えないで、パソコンで可能な限り再現（解説編 p.1-7）

し、公にすることは、著者の一貫した考えかたであった。これに基づいて、我々ないしは、後世の誰でもが、各自自由に、自由に、地図を描いたり、解釈を行ったり、あるいは『地図集』を点検したり『解説編』を検討したりできるのである。著者の見識と学的良心とを、ここにみつめよう。

『地図集』は、既述の如く三重さんによりコンピュータ処理によりプリントアウトされた。公刊に時間のかかったかわりに、このような新手段を用いることができた。方言地理学の問題点の一つに、調査完了から地図化の段階に、多大の労力と時間がかかることがある。このあたりが、これによって、今後、かなり解決されよう。ただ、作図に際し、コンピュータ故の作業限界もあるようである。並存や近接地点へのマークの描きかたを見ると、マークが重なって別種のマークに見えたりする。幸い、黒・橙・緑三種の色が符号化に採られているので、多くは、まぎれることから救われている。当方法によるかぎり、色分けは必須である。

それは別としても、経済的事情さえ許せば、多色法は、実に有効であることを、当地図集は語っている。当地図集では、その色に、長野県系、富山県系といった意味を持たせている。多色法の可能性は、今後の、追究されるべき沃野である。

もつとも、当地図集では、事象の種類は、一般に一〇種以下、稀に多くても一五種弱である。この程度ならば、施符そのことは、一色で十分に間に合う。事象の分布相も、一般に簡素簡明である。

さて、当地図集で大きな特徴の一つは、単項目の図のほかに、関連項目を複数種組み合わせて、それを一枚の地図にしているものが、非常に多いということである。その結果、単項目で見えていた時とは、

また別な分布相や地域差が見えてきて、有効である。例えば、「借りる／貸す」(B一〇九図)など好例と言えよう。関連的・体系的に項目を整理して言語地図を作成することは、今後大いに追究・発展されるべき分野であると、評者は日頃考えている。

ここで、当地図集を享受・活用する立場からの贅沢な評・希望を述べることを許されたい。それは、一枚の地図には、その項目に関わる諸情報が総合的に記されることが理想である、ということである。例えば、『解説編』B一三四「鳥おどし(1)/(2)」を見よう。

対応する「地図集」のB一三四の図を見ると、先ず、質問文が記されていない。それを知るためには、別冊の「資料編」によらねばならない。

『解説編』には

あらかじめ物としての鳥おどしを一〇種類(I-X)用意して、物を区別しながらその名を尋ねている。(p.三四二)

とある。ところが、それがいかなるものかは、地図にも、解説にも、探し当てた「資料編」の質問文の一五八・一五九部にも見当たらない。それがどこに示されているかの指示もない。やむなく、『資料編』の目次にもどって、それらしい項目を探し、ページをくる。そしてやっと、その絵にたどりつく。ところが、『地図集』に「鳥おどし(2)——I—III」とあるも、そのIの絵がない、というありさまである。『地図集』の当図の凡例を見ると、方言現象の語末部しか記されていない。その各全体像はいかなるものかは、今度は「解説編」のp.三四二の記述の下部まで読まねばわからない。

一方、同頁に、

一-aは中央部に、一-bは根知にそれぞれ固有の分布地域を持つて

いる。……

とある。「根知」とはどこかを知ろうとすると、『地図集』のはじめの方の「地勢」(A一図)に立ち返らねばならない。

インフォーマントが、何か説明を加えたりしていないかと、それを知ろうとすると、今度は、『資料編』の「採録資料」をめくることになる。ところが、その配列が、地図の番号順に並んでいないので、何頁に出てくるのか探しようがない。手探りで探すしかないといったありさまである。

これらは、見開きの前地図裏面が白紙なのを利用して、記せなかったのか。また、「根知」等の谷名、川名は、各図作図に先立つ白地図段階で刷り込んでおけなかったのか。

右の逆のことも言える。「採録資料」には、各項が、三回の異なる調査年のうちのどの年の調査か、どういう質問文でなされたのか等々の記述がない。それを知るには、上記と同様の探索の旅の必要がある。

全体的に、三分冊に分けたことが、整理上は整然としたが、その結果、有機性に欠ける不如意さを由来することになったか、との感がある。

なお、地点番号についても、似たようなことが言える。いわゆる国研方式のメリットは十分に認めた上での論である。例えば、5621452の地点はどこかを知ろうとして、地図に臨む。これが、時間がかかり、実に探しにくい。特に地点密度の高い地域になると、その困難さは、さらに増し、正確さは期し難い。そこで、提案である。この方式に加え、通し番号方式を加えてどうか。地図は解釈するために作るものではないか。諸作業は、その一点に奉仕するこ

とを重視すべき、と考えるものである。

おわりに

当研究の目的「糸魚川地方の方言に関する情報と分析を提供するだけでなく、言語地理学の方法を開発する」ことは、ここに、一つの結実を得た。今後、続刊の完成を待つてさらに大きな結実を得ることになる。『方法開発』の一つの結実は、すでに既刊『言語地理学の方法』に見ることが出来る。それは、いわば、中間的結実とも言える。今後、続刊の完成を得た時は、第二の、結論的『言語地理学の方法』を生み出しうる段階のはずである。その完成を、心より期待申し上げる。と共に、我々も、これに導かれつつ、それを志向せねばならない。

当研究及び当著者は、日本の近代的方言地理学の夜明けを飾る記念碑として、同時に現在の牽引機能をも發揮するものとして、国立言語研究所の『日本語地図』と共に、斯界に、未永く光彩を放つていくにちがいない。

柴田氏をはじめ、グロータス・徳川・馬瀬氏各位の学恩に深甚の敬意と謝意を捧げ申し上げる。

（柴田武著『糸魚川言語地図 上巻 地図集』A3判、二七〇頁、
『同 データ集』A4判 一一二六頁、『同 解説編』A4判 三三
四頁、Willem A. Grootaers 著『The Linguistic Atlas of Itoigawa
Niigata Prefecture, Japan I Introduction and Map Explanations
in English』A4判 二〇三頁 秋山書店刊 四冊セット 定価
九七八五〇円（税込））